

“土地の歴史”を重視した土木遺産の保存・利活用計画のコンセプトづくり —重要文化財虹澗橋を事例として—

日本大学理工学研究科研究生 正会員 堀川 洋子
日本大学理工学部 正会員 伊東 孝

1. はじめに

平成11年(1999)12月、大分県大野川水系三重川に架かる虹澗橋が国の重要文化財に指定された。地元では河川公園としての「虹澗橋周辺整備計画」がもちあがった。しかし叩き台として提案された周辺整備計画は、虹澗橋という土木構造物本体に主眼をおき、場の理解に不可欠な“土地の歴史”の調査は不十分であった。そこで本研究では、橋本体のほか「橋空間」全体を調査し、古文書・古絵図・郷土史研究の史実調査¹⁾、橋空間に残る架橋以前・以後の遺構調査と地元ヒアリングから、場の歴史と文脈を整理し、周辺整備計画のコンセプトにいかした。

2. 虹澗橋の概要

虹澗橋は、当時の石橋アーチ橋で最大スパン(25.2m)を誇る。三重町と野津町の町界に位置し「柳井瀬(ヤナイゼ)渡り」のあった場所に架かる。「渡り」とは飛石橋など川を渡るための空間で、「柳井瀬」は橋周辺の地名である。

城下町であった臼杵と竹田を結ぶ往還の重要な橋という位置付けは、昭和63年(1988)に新虹澗橋が架橋されるまで続いた。現在は新虹澗橋がほとんどの交通を担っている。橋詰の「虹澗橋記」(文政9年(1926)建立)の碑文は、「柳井瀬の渡りは兩岸が高く険しいため、年貢米の運送が困難であった。そこに甲斐源助、多田富治、後藤喜十郎という3人の豪商が架橋に名乗りをあげた。織平という石工を得て、文政4年(1921)1月に工事を始め、7年(1924)6月に竣工した」と要約できる。



写真—1 虹澗橋

3. 「土地の歴史」の調査

図-1は、史実・現地・ヒアリング調査から得た虹澗橋の「橋空間」に残る遺構分布図である。橋周辺の地元住民および郷土史家へのヒアリング調査前は、このうち橋本体、虹澗橋碑・馬頭観音像のみしか発見できなかった。馬頭観音像は、その由来まではわからなかった。「橋空間」には、架橋以前の旧道があることは想定できたが、存在を具体的に示す遺構を発見することはできなかった。

ヒアリング調査は、「新しい橋は、渡りの近くに架かる傾向がある」「地域で重視された橋の『橋詰空間』には人が集まる『たまり空間』が存在しやすい」など、「橋空間」の特性を考慮しながらおこなった。史実調査と現地調査から得た断片的なキーワードをきっかけにして、架橋前後の景観(どこに何があったかを含む)や、「橋詰空間」「水辺空間」の利用形態を、時間軸にそってヒアリングした。

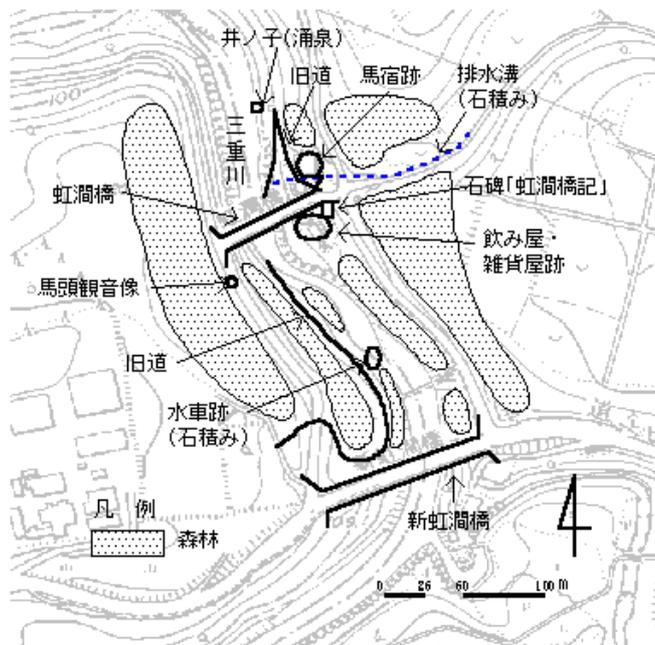


図-1 虹澗橋の「橋空間」の遺構分布図

4. 調査結果 —「柳井瀬の橋空間」の物語—

(1)架橋以前(柳井瀬渡り時代)

虹澗橋の「橋空間」には、架橋以前、瀬を渡るための「柳井瀬渡り」があった。柳井瀬渡りの存在は、郷土史家・

キーワード：土木遺産，保存・利活用，土地の歴史，虹澗橋，文化財，橋空間

連絡先：〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 TEL：047-469-5572 FAX：047-469-2581

波津久文芳氏の論文「三重往来筋柳井瀬渡」(H11 年)で知った。後日、波津久氏に現地を案内していただき、兩岸河川敷の旧道跡(約 1/10 勾配)とわずかに残る石垣遺構を確認した。虹澗橋の真下付近には近年まで、飛石橋の遺構があったが、昭和 18 年(1943)の洪水で流出した。

旧道のルート(図-1)は、波津久氏の説のほか、大分県の「歴史の道」調査など既存研究の整理、地元ヒアリング、旧地図からの考察、虹澗橋付近の地形の簡易測量、三重町・野津町に部分的に残る往還の地形特性(旧道は台地の上を通り、尾根沿いを歩く)との比較など、総合的に判断して推定した。

右岸側河川敷には、旅人や馬宿(後述)が利用していた「井ノ子」(湧泉)が、今も湧いている。



写真-2 左岸河川敷に残る柳井瀬渡りの旧道跡

(2)虹澗橋架橋以後

虹澗橋は、「虹澗橋記」によれば、もともとは臼杵藩への年貢米運送のために、多大な犠牲を払って架けられた橋である。しかし廃藩置県後も地元へ益を供し続けた。

明治～大正の馬車時代、往還は竹田の山の幸と臼杵の海の幸を交換する流通の道として活躍した。地元では「尻口もうけてのう」(行き帰りもうかる)といわれた。ヒアリング調査前は実態がわからなかった馬頭観音像は、この時代、往還から三重川へ転落死した馬を供養するため、ばひつ馬匹運輸組合が祀ったものである。「虹澗橋記」の前の小さな空地では、馬供養の盆踊りが一時期おこなわれた。

右岸上・下流の橋詰には、馬車時代、馬宿があった。馬宿は魚の中売りも兼業し、小さなセリが開かれた。店屋は、馬車時代以後、戦前までは飲み屋、戦後～自動車時代前は豆腐・味噌・菓子などを売る雑貨屋など、さまざまな「店屋」として地域住民に親しまれた。

紙面の都合上割愛するが、「柳井瀬の橋空間」では、近代以降も、地域と関わりの深いさまざまな物語があった。

そして現在、虹澗橋が国の重要文化財に指定され、「橋空間」は河川公園として、地域と関わろうとしている。



写真-3 往還脇に残る馬頭観音像

5. コンセプトの作成

図-2 に、虹澗橋周辺整備計画のコンセプトを示す。

「柳井瀬の橋空間」には、虹澗橋架橋以前・以後で 2 本の道があり、それぞれに飛石橋と虹澗橋の 2 つの橋が存在した。石碑「虹澗橋記」では、人もよりつかない険しい場所という印象が強いが、実際は、橋詰や河川敷に、井ノ子・店屋・水車など人々が集う「たまり空間」が、時代に応じて現れた。

周辺整備計画では、これらの遺構と「土地の歴史」を継承し、あたらしい時代に対応した「橋空間」を創出したい。

「柳井瀬」の橋空間



図-2 虹澗橋周辺整備計画のコンセプト¹⁾

6. まとめ

土木遺産の保存・利活用には、地域住民の愛着が大切である。本研究では、土地に残る遺構や古文書・古絵図の史実の調査後、各事物について郷土史家・橋周辺に住む地元住民にヒアリングをおこなうことで、「土地の歴史」を掘り起こし、コンセプトに生かした。遺構は目立たないものが多く、史実も全国的に知られる事件ではないが、地域の歴史を理解するうえで、重要なものであった。

今後は、得られたコンセプトを周辺整備計画の配置と形およびデザインにどのように生かすかが課題である。

本稿は、(財)前田記念工学振興財団の平成 12 年度研究助成をうけ、大分県、三重町・野津町の協力を得て作成した。謝意を表します。

参考文献:1)堀川洋子・伊東孝「近代遺跡」評価方法による土木遺産の保存・利活用コンセプトの提案—大分県虹澗橋を事例として』『第 27 回関東支部技術研究発表会講演概要集』2001 年